

随想

十二支と

歌舞伎

久 知 藤 後

(会 員 佐 伯 市 中 山 区)

今年は辰の年である
十二支の中で、現実
存在せぬたった一つの
動物である。それでい
てなんとなく実在して
いるように思う動物で
もある。

私は西年の生まれの
せいか蛇が苦手で、蛇
を見ると全身が総毛立
ち、百メートル競争の
世界新記録でも作るよ
うな早さで逃げる。だが、同じ長いものでありながら竜
には全然それを感じない。感じないどころか、(もし実
在するものなら)と、あこがれさえ感じている。

その辰(竜)を開運暦で見ると、
辰即ち竜は、吉兆とされる架空の動物で、活力にあふ
れ、勢いに乗じて福運を呼ぶ、希望に満ちた前途を表わ
す。

とあった。

昨年暮れからの円の暴騰、株価の不安定と、揺れ動
く経済状況の中だけに、新しい年に期待する人も多か
う。日ごろはあまり口にしないうえとも正月だけは別で、
とかくあれやこれやとこじつけて、(今年こそは良い年
に)と、毎年毎年同じことを繰り返している。でも、本
音のところ(今年こそはなんとかしてほしい)という気
持は私も持っている。

もともと十二支というのは、中国古代の陰陽五行説に
基づく暦法であって、これに動物をあてたり、凶像化し
たり、文様化したりしたのは、仏教など外来思想との結
合によるものであると言われているが、そういえば、昔
は方角や時間の呼び名にも用いられている。ちなみに「
辰」の方角といえば、東から南へ三十度の方向、「辰の
刻」といえば、今でいう午前八時から二時間以内ぐら
いずれにしても一日の始まりであったり、陽の方角にあ
たるのだから、案外明るい年になるかもしれない。

その一方でこんなことも考える。「竜」という言葉を
聞くと、つい「竜虎相打つ」など思い出して、(ひょつ
としたら荒れるんじゃないだろうか)と思ったりする。
あれは、私が結婚間もないころの童年の正月の朝、何が

原因だったか覚えていないが、二人で大喧嘩をし、着ていた自分の服を引破ったことがある。そのせいもあって竜年というと荒れそうな気がしてならない。いずれにしても「竜頭蛇尾」なんていうことにならないようお願いしたいものである。

もう二月。年賀状の抽せんも終わり、来年に備えて整理もすんだが、その年賀状にもいろいろな竜の絵が書かれていた。私もその一人だが、さて書く段になって（竜の絵か。これは大変だぞ）と思ったが、いざ書いてみたら、これが思ったより簡単だった。もっともそれには訳があつて、それというのがお手本がよかつたせいである。お手本にはNHKの墨絵のテキストを参考にした。勿論、出来不出来は別である。

前置きが大変長くなつたが、今号はその十二支と歌舞伎について



書いてみよう。

私は歌舞伎が大好きである。それも昨日、今日好きになつたのではない。小学生のころからである。父が三度のめしより芝居の好きな人だったので、小さい時から父に連れられて劇場通いをした。現在、活動している映画や演劇の評論家の話を聞くと、大概みんな同じように、子供のころから劇場通いをした人が多い。不幸なことにそんな才能には恵まれなかつたけれど、好きなことにかけては人には負けない。

いろんなものを見た。そんな中で歌舞伎を面白いと思うようになったのは、小学校の高学年のころだった。

ある年の冬、町の消防団が基金集めのため歌舞伎を呼んだ。一流というわけにはいかなかったが、旅回りとしては比較的まとまつた劇団だった。その演目の中の「近江源氏先陣館」にすっかり魅せられてしまった。以来、私は大の歌舞伎ファンになってしまった。

戦前、東京で働いていたので、暇があれば劇場通いをした。もう今は亡き六代目尾上菊五郎、先代の中村吉右衛門・同じく市村羽左衛門等々、名優の舞台に接してきた。

さて、その数多い歌舞伎の演目の中で、十二支とかかりあいのある、私を見たことのある演目にどんなものがあったか。まず、辰の年にちなんで竜からいつてみよう
「鳴神」。ご覧になった方もあると思う。この芝居、竜そのものは姿を見せないが、話の内容からすれば重要な役所である。

ある年、鳴神上人が大内へ願いを立てたが許しが出なかった。

これに怒った上人は三千世界の竜を封じ籠めて、世界に、雨を一滴も降らせぬ行法を始めた。霊験あらたか来る日も来る日も雨は降らない。

これに困った大内では、帝の勅命によって雲の絶間姫という絶世の美女が上人のもとに



送られる。色と酒によって、その行法を破り、雨を降らせようというのである。さてどうなるか。

こんなわかりやすい物語である。

この作品、もとは「雷神不動北山桜」という作品で、内容が明るいで、よく正月に上演される。

また、内容がわかりやすいので、海外公演には欠かせない演目になっている。男ばかりの登場の中に、目の覚めるような美女が登場するのだから美しさがひとときわ目立つ。

竜が出れば虎を出さないわけにはいかない。虎の出るものといえば次の二作品がある。不思議なことに、どちらも近松門左衛門の作になる。

一つは「傾城反魂香」土佐将監閑居の場。俗にいう「吃又」である。江州六角家のお家騒動を背景に、不具の芸術家吃の又平の苦心と出世の物語で、悲痛きわまる場面が奇蹟によって一変、ハッピー・エンドになる心あたたまる芝居で、この場に絵に書いた虎が暴れ回る所がある。

いま一つは「国性命合戦」。主人公の和唐内が、日本と中国とを舞台にお家再興を図る波乱万丈の物語で、こ

の中に虎を退治する場面がある。

私も夏の国立劇場の高校生向けの歌舞伎教室でこの芝居を見た。面白かったのは、この中の「紅流しの場」のアイデアが、黒沢明の「椿三十郎」という作品の中で使われていることだった。

竜と虎が出たところで、今度は十二支のトップにある鼠に移ろう。鼠は「東海道四谷怪談」などの怪談物につきものだが、そのほか「祇園信仰祭祀記」の金閣寺の場のように、桜の花びらで書いた鼠が姫を助けるようなものもある。だが、なんといってもその姿を見せる「伽羅先代萩」床下の場の鼠がいい。前場の花やかな女ばかりの出場する御殿の場から一転して、ここから男ばかりの芝居になる。悪家老仁木弾正が鼠に姿を変え、悪人共の連判状を忠臣政岡から取り上げ床下に逃げる。それを追った荒獅子男之助と争い、みけんを割られて花道へ逃げる。やがて花道のスッポンから元の仁木弾正に戻り、連判状をくわえての引っ込み。このお芝居の見せ場である。

トップが出たところで、今度はしんがりの猪といこう。猪が芝居に思ふかもしれないが、これが出ないと芝居にならないものがある。「仮名手本忠臣蔵」がそれで、

ご存じのようにこの芝居は大変長いもので、全部上演すると十二時間ぐらいかかる。しかし、劇の大筋をわけてみると、一つはお軽勘平の物語。いま一つは、松の廊下で、浅野内匠頭を後ろから抱き止めた加古川本蔵と大星由良之助との物語にわけられる。

そのお軽勘平の物語のうち、五段目の山崎街道の場に猪が登場する。やがて、この猪の登場によって、与市兵衛・定九郎・勘平の糸がもつれ、ついに勘平の切腹で、この芝居の悲劇的な幕をしめる。ほんの短い間の登場だが、その占める役割は大きい。

そのほかの動物も出場する芝居もあるが、以上の四つに比べるとあまり目立たないようにある。

ついでに他の動物はどうかを見ると、忘れてならないものに狐が



ある。

狐の出る芝居は多い。その代表的なものが「義経千本桜」である。「義経千本桜」は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に三大歌舞伎に挙げられる大作である。

このお芝居も大変長いもので、義経の忠臣佐藤忠信の形で現われる源九郎狐の哀れなロマンスが中心で、これに平維盛・知盛・教経の話が入っている。狐が登場するのは二段目の「鳥居前」と四段目の「吉野山の道行」、それに四の切といわれる四段目の「川連法眼館の場」でこの三つの芝居は、年間を通じて最も上演回数が多いものである。

中でも「義経千本桜」は、現市川猿之助が最も得意とするもので、その早変わりと宙乗りには定評があり、昨年もヨーロッパ各地を公演し、日本に歌舞伎という芝居のあることを、外国人に強く印象づけている。

私も今から二十年程前、東京の新橋演舞場で、彼の演ずる芝居を見た。まだ彼の若いころで、まるで体操選手のような身のこなしに驚いたものだった。あるときは狐に、またあるときは忠信にと、その早変わりの妙味と、

最後に三階席の私達の目の前に宙乗りで引っ込んで来た時は、思わず手をたたいた程感銘した。

面白かったのは、狐で登場している時使う言葉で、これを狐言葉というそうである。

このほか狐が出る芝居で忘れてならないものに「本朝二十四孝」がある。これは武田・上杉の争いを軸に展開するもので、八重垣姫が恋人の危難を救うことを決心する「奥庭の場」に狐が登場して、これを助ける。有名な十種香の場で、これも一度舞台で見たことがある。

以上、ほんのさわりだけを書いてみたが、こうして見ると、歌舞伎と動物のかかりあいは、私達が思っている以上に深いものがあるような気がする。

近年、歌舞伎は古い。よくわからない。テンポが遅くてついていけないと頭からきめてかかる人が多いようだが、じっくり見ると、いろんな面で大変優れたものがある。私達が古い歴史をたずねるように、演劇の世界でも時には古いものをたずねてほしいと、私は思っている。